



温熱療法

がん性疼痛は、がん患者のQOL(生活の質、quality of life)に多大な影響を与える因子です。疼痛の原因となっている腫瘍や転移巣そのものには外科的治療や、化学療法、放射線治療が行なわれます。しかし、これらを直接治療することが難しい場合、もしくは補完する場合に薬物療法や非薬物療法による除痛を図ることになります。非薬物治療には温熱療法や、マッサージ療法、アロマセラピーなどが挙げられ、その中でも温熱療法が最も簡便に取り入れられやすい手法です。

温熱療法の生理的作用として交感神経の活動抑制と血流の増加、過緊張となっている筋肉のリラクゼーション、新陳代謝の亢進、皮膚・結合組織の伸張性向上が期待できます。これらの作用が相まって疼痛の緩和が得られるものと考えます。



ご自宅で温熱療法を行なう際には、市販のカイロやホットパックを使用します。ご家庭にあるもので代用する場合は温タオルや温めたこんにゃく、お湯を染み込ませた紙オムツを代用することもあるそうです。



これらの方法は熱伝導率が良く熱傷の危険があるため、バスタオルなどで包み、施行時間は約 20 分を目安にします。

全身を温めるには入浴、手浴、足浴が効果的で、その際に好みのアロマオイルを滴下することで更なるリラクゼーション効果が期待できます。

注意すべき点としては、これらは薬物療法の代替療法ではなく、薬物治療の補完療法であるという点です。薬物療法を行なっている上に非薬物療法を併用することによって、薬物の効果が増強したり、薬物量を減少させたりすることが可能になるとされています。また、意識障害の強い場合や、患部の感覚障害が強い場合にはやけどや凍傷のリスクがあるため皮膚の状態を注意深く観察する必要があります。また、急性炎症や出血傾向にある部位に対しては炎症の増悪や、出血を招くため、禁忌となります。

文責 理学療法士 小野

お知らせ



日本ホスピス緩和ケア週間

・緩和ケア全般についての相談受付(予約不要 無料)

10/11(水) 11:00-12:00

14:00-15:30

・ポスター掲示 パンフレット配布

10/2(月)-12(木)

場所:外来棟2階(旧正面玄関)



緩和ケア勉強会

・「乳がん看護」

阿部 知子 乳がん看護認定看護師

11/22(水) 17:45~

場所:講堂 1・2

